

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ			薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量(上 限があるもの)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
ビタミン A	ビタミンA チョコラA錠	網膜の暗順 応を高める。 粘膜の異常 乾燥、角化、 損傷、眼球乾 燥症、角膜炎 化症を改善 し、疾病に対 する抵抗力を 増す。	エトレチナート ・トレチノイン(ビ タミンA過剰症 と類似した副 作用症状を発 症)	バクリタキセル(バクリタキセ ルの血中濃度が上昇)		大量・長期投 与にてビタミン A過剰症 状:頻度不明 (大泉門膨 隆、神経過 敏、頭痛、食 欲不振、嘔 吐、肝腫大、 脱毛、そう痒 感、体重増加 停止、四肢 痛、骨痛、関 節痛)	頻度不明(過 敏症)		エトレチナート製剤 を投与中(ビタミン A過剰症と類似し た副作用症状を 発症)、トレチノイン製 剤を投与中(ビタミン A過剰症と類似 した副作用症状を 発症)、ビタミンA欠 乏症の婦人以外 又は妊婦を希望す る婦人(海外で奇 形発現)			妊婦、産婦、 授乳婦等へ の投与では、 ビタミンAの 積貯を目的と して本剤を用 いる場合は、 食品などから の摂取量に 注意し、本剤 による投与は 5,000IU/日 未満に留め るなど必要な 注意を行うこ と。	ビタミンA過剰症 はビタミンA摂取 後12時間前後で 発症する急性過 剰症(急性症)と ビタミンAを蓄積 して月以上摂取 した際に発症す る慢性過剰症(慢性症)とが ある。	大量・長期投 与により、ビ タミンA過剰 症状があら われることが ある。		治療の目的には、ビタミン Aとして通常成人1日10, 000~100,000ビタミンA単 位を経口投与する。なお、 年齢、症状により適宜増 減する。なお、ビタミンA として通常成人1日3,000~ 100,000ビタミンA単位であ る。高齢者では減量。	ビタミンA欠乏 症の治療 夜盲症、結膜 乾燥症、角膜 乾燥症、角膜 軟化症  下肥疾患のう ち、ビタミンA の欠乏または代 謝障害が関与 すると推定され る場合 角化性皮膚疾患
ビタミンB 1	ビタミンB1 (塩酸チアミ ン)	塩酸チアミ ン散0.1% 「ホエイ」/ 塩酸チアミ ン散1%「ホ エイ」	ビタミンB1は ATP存在下に thiamine diphosphate に変換し、生 理作用を現 す。ピルビン 酸の脱炭酸 反応やTCA サイクル内の αケトグルタ ル酸の脱炭 酸反応に関 与。トランスケ トララーゼの補 酵素として五 炭糖リン酸回 路での糖代 謝や核酸代 謝にも関与				頻度不明(過 敏症)						ビタミンB1の 欠乏または 代謝障害が 関与すると推 定される疾患 (神経痛、筋 肉痛・関節 痛、末梢神経 炎、末梢神経 麻痺、心筋代 謝障害)で は、効果がな いのに月余 にわたって漫 然と使用す べきでない。		通常、成人には塩酸チアミ ンとして、1回1~10mgを1 日1~3回経口投与する。 塩酸チアミン散0.1%「ホエ イ」:1回1~10g、1日1~3 回経口投与 塩酸チアミン散1%「ホエ イ」:1回0.1~1g、1日1~3 回経口投与 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンB1欠 乏症の予防及 び治療 2. ビタミンB1の 需要が増大 し、食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 甲状腺機能亢 進症、妊産婦、 授乳婦、はげ しい肉体的労働 時等) 3. ウェルニッケ 脳炎 4. 脚気衝心 5. 下肥疾患の うち、ビタミン B1の欠乏または 代謝障害が関 与すると推定 される場合 神経痛、筋肉 痛・関節痛、末 梢神経炎、末 梢神経麻痺、 心筋代謝障害 [5. の適応に 対して、効果が ないのに月余 にわたって漫 然と使用すべ きでない。]	

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ			重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロー ル上昇抑制 作用 家兎に酪酸リ ポフラビンを 投与すると、 ラノリン-綿 実油投与によ る血清コレス テロール値の 上昇を抑制し た。				0.1~5%未 満(下痢、悪 心・嘔吐、胃 膨満、腹部膨 満)、0.1%未 満(胃不快 感、食欲不振)													酪酸リポフラビンとして、通 常、成人1日5~20mgを2 ~3回に分経口投与す る。 高コレステロール血症に は、通常、成人1日60~ 120mgを2~3回に分経経 口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。  ・高コレステ ロール血症 ・ビタミンB2欠 乏症の予防及 び治療。 ・下記疾患のう ち、ビタミンB2 の欠乏又は代 謝障害が関与 すると推定され る場合: 口角炎、口唇 炎、舌炎、脂漏 性湿疹、結膜 炎、びまん性 表層角膜炎 ・ビタミンB2の 需要が増大 し、食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 妊産婦、授乳 婦、はげしい肉 体労働時等)。 高コレステロ ール血症及びビ タミンB2の欠 乏又は代謝障 害が関与する と推定される 場合の適応に 対して、効果が ないのに月余 にわたって漫 然と使用しな いこと。

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ		薬理に基づき 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
ビタミンB6 (塩酸ピリド キシン)	アデロキシ ン錠	塩酸ピリドキ シンは体内で リン酸ピリド キサルとなり、細胞・ミト コンドリア内 におけるB6群 素群の補酵 素として生体 のたん白質・ アミノ酸代謝 の中心的役 割を果たす。 γ-アミノ酪 酸の生成や 各種のアミン 類(アドレナ リン、ノルアド レナリン、5-ヒ ドロキシトリ プタミン等)の生 成に不可欠 である。 脂質代謝との 関係も認めら れている。	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意  レボドパ(レボドパの作用を 減弱)			頻度不明(手 足のしびれ、 知覚異常等)	頻度不明(光 線過敏症)					ビタミンB6の 欠乏又は代謝 障害が関与 すると推定 される次の疾 患では、効果 がないのに 月余にわたっ て濫然と使用 すべきでない。 口角炎、口唇 炎、舌炎、急 ・慢性湿 疹、脂漏性湿 疹、接触皮膚 炎、末梢神経 炎、放射線障 害	塩酸ピリドキシンとして、通 常成人1日10~100mgを経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。 きわめてまれであるが、依 存症の場合には、より大 量を用いる必要がある場合 もある。依存症に大量を 用いる必要のある場合は 観察を十分に行いながら 投与すること。特に新生 児、乳幼児への投与は少 量から徐々に増量し、症 状に適合した投与量に到 達させること。高齢者では 減量。	ビタミンB6欠 乏の予防及び 治療(薬物投 与によるものを 含む。例えば イソニアジド、 サイクロセリン、 ペンシラミン) ビタミンB6の需 要が増大し、 食事からの摂 取が不十分な 際の補給(消 耗性疾患、妊 産婦、授乳婦 など) ビタミンB6依存 症(ビタミンB6 反応性貧血、 ビタミンB6依存 性痲痺、アミノ 酸代謝異常な ど) 下記疾患のう ちビタミンB6の 欠乏又は代謝 障害が関与す ると推定される 場合 口角炎、口唇 炎、舌炎、急 ・慢性湿疹、脂 漏性湿疹、接 触皮膚炎、末 梢神経炎、放 射線障害(宿 醉)	

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
ビタミンB12 (メコバラミン) B12	メコバラミン錠250μg メコバラミン錠500μg	メコバラミンは、生体内補酵素型ビタミンB12の1種であり、ホモシステインからメチオニンを合成するメチオニン合成酵素の補酵素として働き、メチル基転位反応に重要な役割を果たす。 神経細胞内小器官へよく移行し、核酸・蛋白合成を促進する作用 軸索内輸送、軸索再生の促進する作用 髓鞘形成(リン脂質合成)の促進する作用 シナプス伝達の遅延、神経伝達物質の減少を回復する作用を有する。				0.1~5%未満(食欲不振、悪心・嘔吐、下痢)	0.1%未満(過敏症)			水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者(長期大量)					水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたる大量投与は避けることが望ましい。本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって過量と使用すべきではない。		錠250μg 通常、成人は1日6錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。 ただし、年齢及び症状により適宜増減する。  錠500μg 通常、成人は1日3錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。 ただし、年齢及び症状により適宜増減する。  本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって過量と使用すべきではない。水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたって大量に投与することは避けることが望ましい。		末梢性神経障害

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用) 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
ビ タ ミ ン C	ビタミンC(ア スコルビン 酸)	アスコルビン 酸「ヨシダ」	アスコルビン 酸(ビタミン C)が欠乏す ると、壊血病 や小児ではメ ルレル・バ ロ一病を生 じ、一般に出 血傾向の増 大、骨・歯牙 の発育遅延、 抗体産生能 や創傷治癒 能の低下など を起す。コ ラーゲン生成 への関与、毛 細血管抵抗 性の増強や 血液凝固時 間の短縮など による出血傾 向の改善、副 腎皮質機能 への関与(ス トレス反応の 防止)、メラ ニン色素生成 の抑制などが 報告されてい る。				高齢者					下記疾患の うち、ビタミン Cの欠乏又は 代謝障害が 関与すると 推定される場 合(毛細管出 血(鼻出血、 歯肉出血、血 尿など)、薬 物中毒、副腎 皮質機能障 害、骨折時の 骨基質形成・ 骨癒合促進、 肝斑・雀卵 斑・炎症後の 色素沈着、光 線過敏性皮 膚炎)には効 果がないの に月余にわた って漫然と 使用すべき でない。	通常成人1日50~2,000m gを1~数回に分けて経口 投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。高齢者で減 量。	1.ビタミンC欠 乏症の予防お よび治療(壊血 病、メルレル・ バロ一病)、ビ タミンCの需要 が増大し、食 事からの摂取 が「不十分な際 の補給(消耗 性疾患、妊産 婦、授乳婦、は げしい肉体労働 時など。) 2.下記疾患の うち、ビタミンC の欠乏又は代謝 障害が関与 すると推定され る場合。 毛細管出血 (鼻出血、歯肉 出血、血尿など)、薬物中 毒、副腎皮質 機能障害、骨 折時の骨基質 形成・骨癒合 促進、肝斑・雀 卵斑・炎症後 の色素沈着、光 線過敏性皮膚 炎。 なお、2の効 能・効果に対し て、効果がな いのにも月余に わたって漫然と 使用すべき でない。	

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果
		薬理作用	相互作用				重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)			
ビタミンD (アルファカルシ ドール)	ワンアルファ 錠0.25/ワン アルファ錠 0.5/ワンアル ファ錠1.0	本剤は、1 α,25- (OH)2D3とな り、腸管およ び骨等の構 造的組織に分 布するセプ ターに結合し 腸管からの Ca吸収促進 作用、骨塩溶 解作用および 骨形成作用 等一連の生 理活性を発 現する。腸管 からのCa吸 収ならびに血 清Ca上昇作 用を有する。	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	急性腎不全 (顕度不明) 腎機能障 害、貧血(顕 度不明)	0.1~5%未 満(食欲不振、 悪心・嘔気、 下痢、便秘、 胃痛、AST (GOT)、ALT (GPT)の上 昇、BUN、ク レアチニンの 上昇(腎機能 の低下)、そ う痒感、結膜 充血)、0.1% 未満(嘔吐、 腹部膨満感、 胃部不快感、 消化不良、口 内異和感、口 渴等、頭痛、 頭暈、不眠、 いらいら感、 脱力・倦怠 感、めまい、 しびれ感、眠 気、記憶力・ 記憶力の減 退、耳鳴り、 老人性難聴、 背部痛、肩こ り、下肢の つばり感、 胸痛等、軽度 の血圧上昇、 動悸、LDH、 γ-GTPの上 昇、腎結石、 発疹、熱感、 関節周囲の 石灰化(化骨 形成)、嘔 声、浮腫)、			小児、高齢者、妊 婦又は妊娠してい る可能性のある婦 人、授乳婦、高リン 血症の患者	高リン血症の 患者ではリン 酸結合剤を 併用し、血清 リン値を下げ る。	過量投与を防ぐ ため、本剤投与 中、血清カルシ ウム濃度の十分な管理 測定を行い、血 清カルシウム値 が正常値を超え ないよう投与量 を調整すること。		本剤は、患者の血清カル シウム濃度の十分な管理 のもとに、投与量を調整す る。 ・慢性腎不全、骨粗鬆症の 場合 通常、成人1日1回アルファ カルシドールとして0.5~ 1.0μgを経口投与する。た だし、年齢、症状により適 宜増減する。 ・副甲状腺機能低下症、そ の他のビタミンD代謝異常 に伴う疾患の場合 通常、成人1日1回アルファ カルシドールとして1.0~ 4.0μgを経口投与する。た だし、疾患、年齢、症状、 病型により適宜増減する。 ・小児用量 通常、小児に対しては骨 粗鬆症の場合には1日1回 アルファカルシドールとし て0.01~0.03μg/kgを、そ の他の疾患の場合には1 日1回アルファカルシド ールとして0.05~0.1μg/kg を、経口投与する。ただ し、疾患、症状により適宜 増減する。 ・高齢者では生理機能が 低下しているで用量に 注意。小児には少量から 開始し、漸増。	・下記の疾患 におけるビタミ ンD代謝異常 に伴う諸症状 (低カルシウム 血症、テタ ニー、骨痛、骨 病変等)の改善 慢性腎不全、 副甲状腺機能 低下症、ビタミ ンD抵抗性クル 病・骨軟化症 ・骨粗鬆症	
ビタミンE	ユベラ錠	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作用 を有し、血管 壁の透過性 や血管抵抗 性を改善す る。 抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 の失調を是 正する。			0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)				末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 能がないの に月齢にわ たつて過量と 使用すべき ではない。	錠剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールと して、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、静脈血栓 症、糖尿病性 網膜症、凍瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止			

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用の おそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	機能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用法用量	機能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 [過量使用・誤使 用のおそれ]	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
レ-アスバラギ ン酸マグネシ ウム	レ-アスバラ ギン酸マグ ネシウム・カ リウム製剤 アスバラ錠 医療用を使用	カリウム並び にマグネシウ ムは細胞内 に多量に存在 する陽イオン で、細胞の 生理的機能 の維持に重要 な働きを示す。 レ-アスバラギ ン酸カリウム とレ-アスバラ ギン酸マグネ シウムの等量 混合物は、 KCl、MgCl <sub>2</sub> な どの無機塩に 比べ組織移 行性が高く、 電解質平衡 異常時のカリ ウム、マグネ シウム補給に 優れた効果を 示す。	カリウム保持性利尿剤・アン ジオテンシン変換酵素阻害 剤・アンジオテンシンII受容体 拮抗剤(高カリウム血症)、 活性型ビタミンD製剤(高マ グネシウム血症)	心臓伝導障 害(大量投 与)	頻度不明(腎 臓障害、胸や け、下痢、嘔 吐、腹部膨満 感、けん息 感、熱感)	頻度不明(腎 臓障害、胸や け、下痢、嘔 吐、腹部膨満 感、けん息 感、熱感)	頻度不明(腎 臓障害、胸や け、下痢、嘔 吐、腹部膨満 感、けん息 感、熱感)	重篤な腎機能障害 (高カリウム血症)、 副腎機能障害(高 カリウム血症)、高 カリウム血症又は 高マグネシウム血 症	腎機能低下あるい は腎機能障害、急 性脱水症、広範囲 の組織損傷(熱傷、 外傷等)、高カリウ ム血症があらわれ やすい疾患(低レニ ン性低アルドステロ ン症等)、高マグネ シウム血症があら われやすい疾患、 妊娠又は妊娠して いる可能性のある 婦人、授乳中の婦 人、低出生体重児、 新生児、乳児、 高齢者	大量投与で心臓 伝導障害	長期投与で 高カリウム血 症又は高マ グネシウム 血症	原則として、レ-アスバラギ ン酸カリウムとして1日225 ~750mg(3~10錠)を2~3 回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 高齢者では減量投与	下記疾患又は 状態における カリウム補給 (マグネシウム 欠乏を合併し ている疑いの ある場合)降圧 利尿剤、副腎 皮質ホルモン、 強心配糖体、 インスリン、ある 種の抗生物質 などの連用時、 低カリウム血 症型周期性 四肢麻痺、心 疾患時の低カ リウム状態、肝 疾患時の低カ リウム状態、重 症嘔吐、下痢、 カリウム摂取 不足及び手術後
クエン酸鉄ア ンモニウム	フェリセルソ ン	本剤は水溶 液中で水プロ トン(番号を増 強させ、消化 管造影剤とし ての有効性が 示されている。		0.1~0.5%未 満(過 敏症)	0.1%未満(過 敏症)	ヘモクロマトーシ スなど鉄過剰症の治 療を受けている [症状が増悪]、 鉄剤に過敏症	消化性潰瘍、潰瘍 性大腸炎、胆石症 腸炎等の胃腸管疾 患、高齢者、妊娠 又は妊娠している 可能性のある婦 人、小児	本剤の投与 により便が黒 色を呈するこ とがある。 本剤の投与に より一過性に 歯や舌がが 着色することが ある		通常、成人にはクエン酸鉄 アンモニウムとして600mg (1包)を300mLの水に溶か し経口投与する。 なお、必要に応じて 1,200mg(2包)まで増量す る。	腹部磁気共鳴 コンピュータ 断層撮影にお ける消化管 (胃、十二指 腸、空腸)造影 する。		
グルコン酸カ ルシウム	カルテコー ル末	抗テタニー作 用、低カルシ ウム血症改善 作用	リン酸エスト ラムスチナト リウム(リン酸 エストラムスチ ナトリウム(これ らの薬剤の効 果が減弱))	高カルシウム 血症・結石症 (頻度不明)	頻度不明(食 欲不振、悪 心・嘔吐、便 秘、胃痛、け ん息感)	高カルシウム血 症、腎結石[腎結 石を助長]、重篤 な腎不全[組織へ の石灰沈着を助 長]、リン酸エスト ラムスチナトリ ウムを投与中[リン 酸エストラムスチ ナトリウムの効 果が減弱]	活性型ビタミンD製 剤を服用、強心配 糖体の投与を受け ている、高カルシウ ム血症があらわれ やすい病態の患 者、高齢者	高カルシウム血 症となる可能 性がある。食欲不 振、悪心・嘔吐、 便秘、筋力低 下、多飲多尿、 精神症状等が あらわれ、さら に重篤になると 不整脈、意識障 害が出現する。 高齢者では高カ ルシウム血症が 起こりやすい。	長期投与に より高カルシ ウム血症・結 石症が現れ ることがあ る。	グルコン酸カルシウムとし て、通常成人1日1~5gを3 回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。高カルシウム 血症があらわれやすいの で、用量に留意すること。 高齢者では腎機能が低下 していることが多く、高カ ルシウム血症があらわれ やすいので用量に留意す ること。 高齢者では用量に留意。	低カルシウム 血症に起因す る下記症状の 改善 テタニー、テ タニー関連症 状 小児脂肪便に おけるカルシ ウム補給		
炭酸カルシウ ム	炭カル錠「ヨ シダ」	沈降炭酸カル シウムは不溶 性カルシウム 製剤の1種 で、制酸作用 を呈し、また 吸着作用もあ らわずに胃 潰瘍及び胃酸 過多症に制酸 薬として用 いる	テトラサイクリン系抗生物質・ ニューキノロン系抗菌剤・エ チドロン酸二ナトリウム・鉄 剤(これらの薬剤の吸収を阻害 し、効果を減弱)、高カリウム 血症改善イオン交換樹脂製 剤(これらの作用を減弱)、 活性型ビタミンD製剤(高カ ルシウム血症があらわれ る)、大量の牛乳(milk-alkali syndromeがあらわれる)、ジ ギタリス製剤(ジギタリス製 剤の作用を増強)	頻度不明(高 カルシウム血 症、アルカ ローシス等の 電解質失調、 悪心、嘔吐、 便秘、下痢、 胃腸の反動 性分泌等)、 頻度不明(長 期・大量投与 で腎結石、尿 路結石)	頻度不明(過 敏症)	甲状腺機能低下 症又は副甲状腺 機能亢進症(病態 に悪影響)	腎障害、心臓機能 障害、肺機能障 害、便秘、高カルシウ ム血症、高齢者		長期・大量投 与で腎結石、 尿路結石	沈降炭酸カルシウムとし て、通常成人1日1~3gを3 ~4回に分割経口投与す る。なお、年齢、症状によ り適宜増減する。高齢者で は減量。	下記疾患にお ける制酸作用 と症状の改善 胃・十二指腸 潰瘍、胃炎 (急・慢性胃 炎、薬刺激性 胃炎を含む)、上 部消化管機能 異常(神経性 食思不振、い わゆる胃下垂 症、胃酸過多 症を含む)		

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ			薬理に基づく 習慣性	適応薬品	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 疑うおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの								
アミノ酸エチ ルスルホン酸 (タウリン)	タウリン散 「大正」	・胆汁酸排泄 促進作用を 有する。 ・実験的肝障害 に及ぼす影 響を有し、 AI-P、γ-グ ロブリン、 BSP、血清コ レステロール /血清コレス テロールエ ステル比を改善 させた。また、 肝細胞の再生 を促進して組 織修復を改善 させた。さら に慢性肝障害 群においては 間質の結合 織増殖を抑制 した。胆汁分 泌などの肝 細胞機能維持 に働いた。 ・心筋代謝改 善作用、心筋 保護作用 ・実験的慢性 心不全による 死亡率低下					0.5%未満 (嘔気、下 痢、腹部不快 感、便秘、食 欲不振)	0.5%未満 (過敏症)								高ビリルビン血 症(閉塞性黄 疸を除く)にお ける肝機能の 改善 うつ血性心不 全
レ-アスバラ ギン酸ナトリ ウム	ナトリウム塩 はなし ウム															
レ-システイ ン	ハイチオー ル錠80	レ-システイ ンは、生体内代 謝系におい て、SH供与体 としての役割 を果たし、SH 酵素の activator(賦 活剤)として 作用する。 皮膚代謝の 正常化、抗ア レルギー、解 毒などの作用 により各種皮 膚疾患に応 用される。 放射線を照 射した動物の 延命(マウ ス)、白血球 減少抑制 (ラット)、脾 障害の防護 (マウス)など					0.1~5%未満 (悪心)、0.1% 未満(下痢、 口渇、軽度の 腹痛)									1.湿疹、尋常 疹、薬疹、中 毒疹、尋常性 ざ瘡、多形滲 出性紅斑 2.放射線障害 による白血球 減少症



ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

ワークシートNo.26

リスクの程度の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上 [過量使用・誤使用のおそれ] 長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化 用法用量 効能効果		
カフェイン	無水カフェイン「エビス」	大脳皮質を中心に中枢神経系を興奮、脳幹網様体の賦活系の刺激により知覚が鋭敏となり精神機能を亢進する。また、脳細動脈に直接作用して脳血管を収縮させ、その抵抗性を増加して脳血流量を減少する。	キサンチン系薬剤・中枢神経興奮薬(過度の中枢神経刺激作用)、MAO阻害剤(頸脈、血圧上昇等)、シメチジン(過度の中枢神経刺激作用)				胃潰瘍又はその既往歴、心疾患、緑内障、高齢者、妊娠又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳婦	[大量・過量投与]消化器症状(悪心、嘔吐等)、循環器症状(不整脈、血圧上昇等)、精神神経症状(ぼんやり、痙攣、昏睡、虚脱、眩暈、不眠、不安)、呼吸器症状(呼吸促進、呼吸麻痺等)、瞳孔散大などの増悪を起すことがある。	妊娠又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳婦には長期適用を避けること。	通常成人1回0.1~0.3gを1日2~3回経口投与する。なお、年齢、体重により適宜増減する。一般的に高齢者では生理機能が低下しているため減量するなど注意すること。	ねむけ、倦怠感、血管拡張性及び脳圧亢進性頭痛(片頭痛、高血圧性頭痛、カフェイン禁断性頭痛など)
グルクロノラクトン	グロンサン散	循環血流量増加				高齢者				1回0.3~1g、1日3回、適宜増減。高齢者では用量に注意	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善、尋麻疹、湿疹、中毒疹、妊娠悪阻、妊娠中毒
ローヤルゼリー	なし										

カルシウム主薬製剤

製品群No. 44

ワークシートNo.27

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬理に基づく 習慣性	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ					過度使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ					
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	適量投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上限があるもの	過度使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
カルシウム補給成分	クエン酸カルシウム	なし														
	グルコン酸カルシウム	カルチコール末	抗ヒスタミン作用、低カルシウム血症改善作用	リン酸エステル・ステロイド系抗生物質・ニューキノロン系抗生物質・エテドロン酸ナトリウム(これらの薬剤の効果が減弱)、非脱分極性筋弛緩剤(これらの薬剤の筋弛緩作用が減弱)	強心配糖体(強心配糖体の作用を増強)、テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗生物質・エテドロン酸ナトリウム(これらの薬剤の効果が減弱)、非脱分極性筋弛緩剤(これらの薬剤の筋弛緩作用が減弱)	高カルシウム血症・結石症(頻度不明)	頻度不明(食欲不振、悪心・嘔吐、便秘、胃痛、けいれん)	高カルシウム血症、腎結石(腎結石を助長)、重篤な腎不全(組織への石灰沈着を助長)、リン酸エステル・ステロイド系抗生物質・エテドロン酸ナトリウムを投与中[リン酸エステル・ステロイド系抗生物質の効果が減弱]	活性型ビタミンD製剤を服用、強心配糖体の投与を受けている、高カルシウム血症があらわれやすい病態の患者、高齢者				高カルシウム血症となる可能性がある。食欲不振、悪心・嘔吐、便秘、筋力低下、多飲多尿、精神症状等があらわれ、さらに重症化すると不整脈、意識障害が出現する。高齢者では高カルシウム血症が起こ		グルコン酸カルシウムとして、通常成人1日1~5gを3回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高カルシウム血症があらわれやすいので、高齢者では用量に留意すること。	低カルシウム血症に起因する下記症状の改善: テタニイ、テタニイ関連症状、小児胎前便におけるカルシウム補給
	炭酸カルシウム	炭カル錠(ヨシダ)	沈降炭酸カルシウムは不溶性カルシウム製剤の1種で、制酸作用を呈し、また吸着作用もあらわすので胃潰瘍及び胃酸過多症に制酸薬として用いる	テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗生物質・エテドロン酸ナトリウム・鉄剤(これらの薬剤の吸収を阻害し、効果を減弱)、高カリウム血症改善イオン交換樹脂製剤(これらの作用を減弱)、活性型ビタミンD製剤(高カルシウム血症があらわれる)、大量の牛乳(milk-alkali syndrome)があらわれる)、ジギタリス製剤(ジギタリス製剤の作用を増強)	頻度不明(高カルシウム血症、アルカローシス等の電解質失調、悪心、嘔吐、便秘、下痢、胃酸の反動性分泌等)、頻度不明(長期・大量投与で腎結石、尿路結石)	頻度不明(過敏症)	頻度不明(過敏症)	甲状線癌術後低下症又は副甲状腺機能亢進症(病態に悪影響)	腎障害、心機能障害、肺機能障害、便秘、高カルシウム血症、高齢者				長期・大量投与で腎結石、尿路結石	沈降炭酸カルシウムとして、通常成人1日1~3gを3~4回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	下記疾患における制酸作用と症状の改善: 胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎、薬性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂症、胃酸過多症を含む)	
	乳酸カルシウム	乳酸カルシウム<純正>	カルシウム不足による疲労、横紋筋攣縮に對し、鎮静、痙攣軽減作用、栄養補給。	テトラサイクリン系抗生物質(併用薬剤の吸収阻害)		頻度不明(便秘、長期投与:高カルシウム血症、結石症)		高カルシウム血症(症状悪化)、腎結石(症状悪化)、重篤な腎不全(組織への石灰沈着の助長)	活性型ビタミンD製剤服用中、強心配糖体服用中、高カルシウム血症のあらわれやすい病態、高齢者				長期投与により、血中、尿中カルシウムが高値になることがある。高カルシウム血症、結石症	1回1g、1日2~5回、適宜増減。高齢者は減量	低カルシウム血症に起因する下記症状の改善: テタニイ、下記代謝性骨疾患におけるカルシウム補給: 妊婦・産婦の骨軟化症、発育期におけるカルシウム補給	
	無水リン酸水素カルシウム	リン酸水素カルシウム<純正>を使用	妊婦、授乳、骨カルシウム沈着減少時などカルシウムとリン酸塩の要求が増すときに、カルシウムとリン酸塩の補給源として用いられる。	テトラサイクリン系抗生物質(併用薬剤の吸収阻害)		頻度不明(長期投与:高カルシウム血症、結石症)		高カルシウム血症(症状悪化)、腎結石(症状悪化)、重篤な腎不全(組織への石灰沈着の助長)	活性型ビタミンD製剤服用中、強心配糖体服用中、高カルシウム血症のあらわれやすい病態、高齢者				長期投与により、血中、尿中カルシウムが高値になることがある。高カルシウム血症、結石症	1日3g、3回分服、適宜増減。高齢者は減量		

カルシウム主薬製剤

製品群No. 44

ワークシートNo.27

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化					
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ							
その他成分	アミノ酸エチル スルホン酸 (タウリン)	タウリン散 「大正」	胆汁酸排泄 促進作用を 有する。 ・実験的肝障 害に及ぼす 影響を有し、 ALP、アブ ロブリン、 BSP、血清コ レステロール /血清コレス テロールエス テル比を改善 させた。また、 肝細胞の再 生を促進して 組織像を改 善させた。さ らに慢性障害 群においては 間質の結合 織増殖を抑制 した。胆汁分 泌などの肝 細胞機能維 持に働いた。 ・心筋代謝改 善作用、心筋 保護作用 ・実験的慢性 心不全による 死亡率低下				0.5%未満 (嘔気、下 痢、腹部不快 感、便秘、食 欲不振)	0.5%未満 (過敏症)			高齢者										アミノエチルスルホン酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うつ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善、うつ血性心不全
塩酸リジン	なし																					
炭酸マグネシウム	「純生」炭 マ	制酸作用。効 力は酸化マグ ネシウムの約 1/2。瀉下作 用。硫酸マグ ネシウムに劣 る。 非吸収性であり、アルカ ロシスを生 じない。		テトラサイクリン系抗生物質・ ニューキノロン系抗菌剤・エ チドロン酸二ナトリウム・セフ ジニル(これらの薬剤の効果が 減弱)、他の併用薬剤(併 用薬剤の吸収・排泄に影 響)、大量の牛乳・カルシウ ム製剤[milk-alkali syndrome (高カルシウム血症・高窒素 血症・アルカローシス等)]			頻度不明(高 マグネシウム 血症・下痢)			腎障害、心機能障 害、高マグネシ ウム血症、下痢、高 齢者					長期大量投 与で高マグネ シウム血症				1.1日2gを数回に分割経 口投与。高齢者では減量 2.1日3～8gを頓用又は 数回に分割経口投与。 高齢者では減量。	1.胃・十二指腸 潰瘍、胃炎 (急・慢性胃 炎、薬刺激性胃 炎を含む)、上 部消化管機能 異常(神経性 食思不振、い わゆる下痢、 胃酸過多症) における制酸 作用と症状の 改善 2.便秘症		

カルシウム主薬製剤

製品群No. 44

ワークシートNo.27

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ			薬理に基づき 蓄積性	酒酔禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	用法用量	効果効果
ビタミンD3	ワンアルファ錠0.25/ワンアルファ錠0.5/ワンアルファ錠1.0	本剤は、1α,25-(OH)2D3となり、腸管および骨等の標的組織に分布するレセプターに結合し腸管からのCa吸収促進作用、骨塩溶解作用および骨形成作用等一連の生理活性を発現する。腸管からのCa吸収ならびに血清Ca上昇作用を有する。	マグネシウムを含有する製剤(高マグネシウム血症を発症)、ジギタリス製剤(不整脈があらわれる)、カルシウム製剤・ビタミンD及びその誘導体(高カルシウム血症を発症)	急性腎不全(頻度不明)、肝機能障害、黄疸(頻度不明)		0.1~5%未満(食欲不振、悪心・嘔気、下痢、便秘、胃痛、AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇、BUN、クレアチニンの上昇(腎機能の低下)、その痒感、結膜充血)、0.1%未満(嘔吐、腹部膨満感、胃部不快感、消化不良、口内異和感、口渇等、頭痛、頭暈、不眠、いらいら感、脱力・倦怠感、めまい、しびれ感、眩暈、記憶力・記憶力の減退、耳鳴り、老人性難聴、背部痛、肩こり、下肢のつっぱり感、胸痛等、軽度の血圧上昇、動悸、LDH、γ-GTPの上昇、腎結石、発疹、熱感、関節周囲の石灰化(骨形成)、嘔声、浮腫)							高リン血症の患者ではリン酸結合剤を併用し、血清リン酸を下げる。	過量投与を防ぐため、本剤投与中、血清カルシウム値の定期的測定を行い、血清カルシウム値が正常値を超えないよう投与量を調整すること。	本剤は、患者の血清カルシウム濃度の十分な管理のもとに、投与量を調整する。 慢性腎不全、骨粗鬆症の場合 通常、成人1日1回アルファカルシドールとして0.5~1.0μgを経口投与する。ただし、年齢、症状により適宜増減する。 副甲状腺機能低下症、その他のビタミンD代謝異常に伴う疾患の場合 通常、成人1日1回アルファカルシドールとして1.0~4.0μgを経口投与する。ただし、疾患、年齢、症状、病型により適宜増減する。 小児用量 通常、小児に対しては骨粗鬆症の場合には1日1回アルファカルシドールとして0.01~0.03μg/kgを、その他の疾患の場合には1日1回アルファカルシドールとして0.05~0.1μg/kgを、経口投与する。ただし、疾患、症状により適宜増減する。 高齢者では生理機能が低下しているため用量に注意。小児には少量から開始し、漸増。	下記の疾患におけるビタミンD代謝異常に伴う諸症状(低カルシウム血症、テタニー、骨痛、骨病変等)の改善 慢性腎不全、副甲状腺機能低下症、ビタミンD抵抗性クurl病・骨軟化症 骨粗鬆症

タンパク・アミノ酸製剤

製品群No. 45

ワークシートNo.28

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応薬品	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上り過ぎるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
ビタミンC	ビタミンC(アスコルビン酸)	アスコルビン酸「ヨシダ」	アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・パロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間による出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。							高齢者					下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血、鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。高齢者で減量。	1.ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・パロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊娠婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など)。 2.下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。 なお、2の効能・効果に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。
アミノ酸成分	L-システイン	ハイチオール錠80	L-システインは、生体内代謝系において、SH供与体としての役割を果たし、SH酵素の activator(賦活剤)として作用する。皮膚代謝の正常化、抗アレルギー、解毒などの作用により各種皮膚疾患に応用される。放射線を照射した動物の延命(マウス)、白血球減少抑制(ラット)、脾障害の防護(マウス)など				0.1~5%未満(悪心)、0.1%未満(下痢、口渇、軽度の腹痛)			高齢者				放射線障害による白血球減少症の場合は、通常、放射線照射1時間前より投与を開始すること。		1.通常成人下記1回量を1日2~3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 L-システインとして1回80mg ハイチオール錠40 2錠、ハイチオール散32% 250mg 2.通常成人下記1回量を1日3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 L-システインとして1回160mg ハイチオール錠40 4錠、ハイチオール錠80 2錠、ハイチオール散32% 500mg ・高齢者で減量。	1.湿疹、尋麻疹、薬疹、中毒疹、尋常性ざ瘡、多形渗出性紅斑 2.放射線障害による白血球減少症	

タンパク・アミノ酸製剤

製品群No. 45

ワークシートNo.28

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効果効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 限るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生 するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 限るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	腫瘍・下痢等(大 量投与)	長期使用に よる健康損 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効果効果
パントテン酸 カルシウム	パルカル散	パントテン酸はCoAの構成成分であり、CoAは生体内でアセチル化をはじめ、ステロイド、脂肪酸、ポルフィリン等種々の生体必須物質の合成に関与するとともに、脂肪、蛋白質、炭水化物の代謝にも関与している。				0.1%未満(大量投与で腹痛、下痢等)								腫瘍・下痢等(大量投与)	パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(ストレプトマイシンおよびカナマイシンによる副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急性慢性湿疹、弛緩性便秘)に対して、効果が無いのに月余にわたって発然と使用すべきでない		通常、成人にはパントテン酸カルシウムとして1日10~200mg(0.1~2.0g)を1~3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. パントテン酸欠乏症の予防および治療、パントテン酸の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦など) 2. 下記疾患のうち、パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合。ストレプトマイシンおよびカナマイシンの副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急性慢性湿疹、弛緩性便秘